様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３７１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５３２９８

研究課題名（和文）配慮を要する学生を対象としたホームルーム（特別支援）クラス制度導入の試み

研究課題名（英文）Implementation of Home Room for Students Requiring Special Care

研究代表者
鬼塚　淳子（ONIDUKA, Junko）

九州産業大学・基礎教育センター・講師

研究者番号：９０５８５６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,800,000円、（間接経費）　840,000円

研究成果の概要（和文）：１,目的　配慮を要する学生への支援として、交流演習とホームルームクラス設置を行い、学生の交流促進による修学の安定継続を図る。２,方法　演習後のスケール、修学状況の変化動向から評価を行った。３,結果　１)利用者数:受講者数46名(単位修得者30名)、ピアルーム利用者数810名（延べ）、ピアスタッフ15名。２a)自己評価スケール平均4.97/10ポイント、２b)成長点として「協調、理解、積極性、交流、共有」の５項目を抽出、２c)46名中41名に修学状況の好転が見られた。４,考察　本実践により、１)登校契機・自己表現機会の創出、２)修学の安定・継続、３)特別支援におけるピアサポート体制創出された。

研究成果の概要（英文）：1. Objective: As part of a support program for students requiring special care, home room and a lecture on interactive exchange were instituted to promote continued schooling through enhanced student interchange. 2. Methodology: Evaluation of trends in schooling situation following practice. 3. Results: (1) Participants: 46 students participated (30 for credit), peer room participants 810 (total of daily participations), peer staff 15 (2a) Self-evaluation scale 4.75 of 10.00 points, (2b) Five items extracted as growth indices (cooperation, understanding, motivation, interchange, sharing), (2c) 41 of the 46 participants exhibited an improvement in schooling situation. 4.Observations: Interchange practice and use of facility resulted in (1) an increase in motivation to attend school, and the creation of opportunities for self-expression, (2) stable continuation of schooling, and (3) the creation of a peer support stance with the special support program.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：障害学生支援　特別支援クラス　ホームルームクラス制度　居場所　ピアサポート（学生相互支援）
自己表現場　感性コミュニケーション　ＰＣＡ（パーソンセンタードアプローチ）

１．研究開始当初の背景

昨今、大学には多様な問題を抱える学生が入学してくる。青年期特有の発達課題や勉強の問題以前に、大学に来られない、教室に入れない学生が増えている。主な理由は、視線が気になる、人が怖い、人の多いところに行けないなどで、これらの学生は小中高の不登校・被いじめ経験者、心理的問題を抱えており、通信制、サポート校、高卒認定者が多い。精神面の問題によってこれまで学校に行けなかった生徒が、大学から突然行けるようになるとは考え難く、しかしながら学力はあるため大検などで入学して来る不適応学生をどのように大学に定着させ卒業まで支援するかの現実的問題に直面しており、可能な支援の方法、システム構築が早急の課題である。

２．研究の目的

本研究では、最近急増している何らかの障がい（不登校、心理的疾病、発達障がい等）を抱える大学生への支援として、(１)学生が大学に来られる環境づくり　(２)講義に出られるようになるためのつなぎと学習支援環境づくり　(３)学生が安心できる学内の居場所と修学支援環境の創出を目的とした、小中高校の特別支援クラスに相当する基礎ゼミクラスを設置する。支援体制として、こころの教室に準じたホームルームに心理専門職を配置、基礎教養科目教員配置などを行う。これらの活動をシステムとして構築し、学生支援および教員支援モデルとなる実践研究とする。本実践を通して、大学内に講義、ゼミ以外でも居場所があり、状態に合った修学支援システムの存在が学生に周知され、現在不適応状態や心理的問題を抱える学生にとって、大学というハードルが低くなり、自分なりの修学の仕方を見つけられ修学復帰できることを目標とし、学生の修学の安定継続を図る。

３．研究の方法

本研究指針に基づいた新たな学生支援体制構築として、以下４段階を想定している。
(１)基礎教育センターを拠点としたホームルームクラス、支援基礎ゼミナール創設。
(２)要配慮学生、障がい学生の所属クラス担任との調整後、受け入れ学生の決定。（初年度は 20 名程度、小中高の特別支援クラスと同様２か所に所属し、場面に合わせて流動的に移行する）
(３)学修相談員とティーチング・アシスタントとの協働に拠り、個々の学生の来学頻度や講義への出席状況に合わせて、居場所・心理的支援・学習支援、所属学部学科・担任との連携を行う。
(４)上記実践と併せて、出席点や試験など単位認定の方策について、各所属学部・担当部所で協議していただきながら、いずれは新たな全学共通の卒業単位取得の道筋に繋いで行く。

４．研究成果

[実践報告]
(１)H24 年度前期：準備期間
①交流演習の開講：研究分担者（教務部長）にコミュニケーション・ソーシャルスキル学習の講座「実践キャリア演習Ｃ」開講許可を依頼（受講学生は面談者のみ）、単位化。②学生抽出とクラス編成:基礎教育センター運営委員会を通じ、各学部運営委員に学生紹介を依頼。③学生相談カウンセラーにも、学生相談室利用学生の紹介を依頼。
(２)H24 年度後期：ピアコミュニケーション演習（以下ピアＣ）開講・ピアルーム（ホームルームクラス）開室
①ピアルーム（ホームルームクラス）として、週の半分を講義の教室、半分は研究代表者の研究室を仮利用。②ピアスタッフの配置（臨床心理学科大学院生・学部生）。③心理専門職担当教員（研究代表者）が受講学生支援（出席確認、課題調整、心理支援、など修学全般）、およびピアスタッフ支援（月例スタッフミーティング、個別相談）を行う。④ピアＣ学習プログラム作成、および成長チェックスケールを毎回講義後に実施。
(３)H25 年度:前年度を踏まえた改善・継続
①前年度活動実績報告、成長スケール評価フィードバック。②ピアＣ演習を通年で実施。③ピアルーム専用教室の確保。④ピアスタッフ FD 研究会発表・学会発表。⑤学生教材用書籍および教員用ワークブック作成。

[成果]
(１)利用者数（H24～H25 年度）:ピアＣ受講者数 46 名（単位修得者 30 名)、ピアルーム利用者数 810 名（延べ数）の利用があり、ピアスタッフ 15 名を配置した。（表１参照）

表１　利用者数　　（単位：人）

	H24 年度（後期）	H25 年度（通年）
ピアＣ演習受講者数（実数）	25	21
単位取得者（実数）	15	15
ピアルーム利用者数（延べ数）	298	512
ピアスタッフ（学生）	7	8

受講者数は当初の想定（約 20 名前後）を確保。実際には、履修制限の関係上受講登録をしない学生や、単位取得後も自分のスキルアップとして継続参加する学生もみられた。
(２)目的の達成度:自己点検評価は、ほぼ達成と評価。
(３)講義における成果

①毎回の講義後の成長チェックスケール平均4.97ポイント（自己開示、自己表現、他者交流の３項目、０が普段通り、-10～＋10範囲）であり、普段の自分よりも自己表現や他者交流ができたと感じていることが表れた。
②最終講義後の自己評価スケール平均3.19/5.00 ポイントであり、最終回講義で実施したＰＣＡＧＩＰによる成長点や変化についての意見として「自己表現、協調、積極性、交流、共有」の５項目を抽出した。毎回の講義後の評価は学生によってばらつきが多くみられたが、最終回の振り返りでは、自己評価が上がったものと、変わらなかったと答えた学生に分かれた。
③修学状況（行動面）の変化：46 名中 41 名（休学者・退学者を除く全員）に、修学状況の段階的な好転（不登校～登校～出席～交流参加～単位取得までの５段階中、１段階以上アップ）が見られた。
④利用学生のポジティブ記述:演習後に毎回行った成長チェックスケールの自由記述から、殆どの学生において、受講前と比較してポジティブな変化を表す記述が得られた。（※テキストマイニング法による記述分析の詳細は、後日論文に掲載予定）
⑤学習プログラム中における主体的な改編：スキル学習プログラム構築過程において、学生が実践の場で自主的に加えたアドリブが大変貴重な成果を生み、結果改編版が定番として活かされ、以降の教材として採用となった。（表３参照）

表３　アドリブセッションによる変化

(１)フルーツひと言バスケット	自主的“おに”争奪戦 ⇒「もっと自分を表現したくなる」
(２)総当たりお話セッション	やけくそ、開き直り ⇒「みんなちょっと無理してる感の共有」
(３)お任せセッション（クイズゲーム）	空回りして自滅 ⇒「それでも何もしないよりまし」
(４)不参加から参加へ	自分らしい居方の変化 ⇒「これでいいと思える」

⑥講義と居場所の連動の相補的効果：講義は週１回のため、中高のクラスと違い、受講学生は会う頻度が少ない。クラスは毎日開室しているが、居場所活用の場合は特にコミュニケーションを図る機会や必要性がない。そのため、講義で学習したスキルをクラスで実践する、あるいはクラスの中で遊びや作業を通じた交流機会を設けるという、相互の循環が関係性の反復に役立っていると言える。
(４)居場所における成果：大学内の居場所、ホームルームクラスの有用性を、利用学生との個別面談から抜粋した。集団意識に対する変化が生じ、ピアメンバーだけの集団＜仲間づくり・ピアサポート受講者参加集団＜一般学生が混在した集団へと適応が向上して行く様子が伺えた。（表４参照）

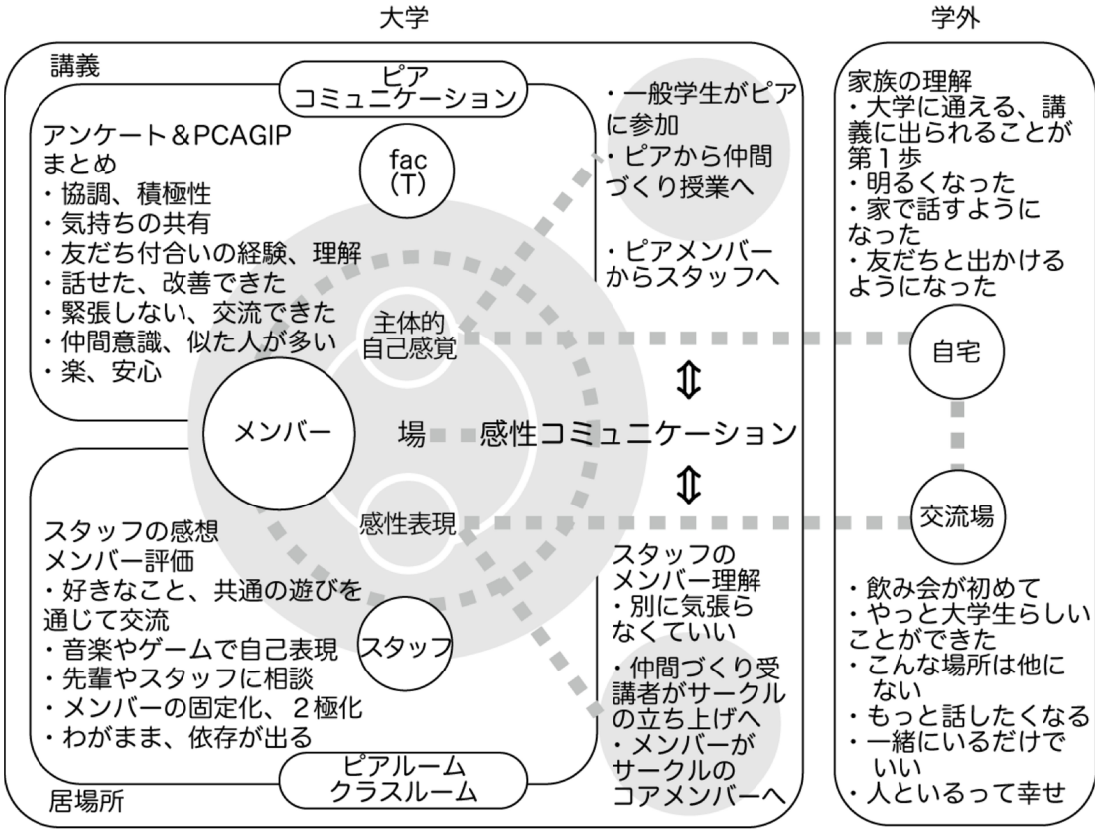
表４　利用学生の行動変化と言語化

これまでの状況　⇒　ピア参加後の言葉	
教室に入れない、授業に出られない	「人の中にいるってしあわせ」
長期引きこもりピアのみ参加	「こんな場は他にない、ピアがあるから大学に来られる」
ずっと人との関わりを避けて来た	「こういうことがしてみたかった」（他学生との飲み会やBBQ）
大学内に友人がいない	「人と話すのがこんなに気持ちいいんだなあと思った」
自信がない、自己表現ができない	「腹の中に貯めて言えなかった言葉を少しずつ吐き出せている」

(５)成果報告および学会発表：日本人間性心理学会における単独発表の他、大学の先進的取組のパネル展示および発表を学生ピアスタッフと共に実施、独立行政法人日本学生支援機構からパネリストの招聘を受けたシンポジウムにおいて、障がい学生支援に関する本学の取組みの一端として、特別支援ピアサポートの取組みの実践報告を行った。
(６)特別支援ピアサポート体制の構築：ピアルーム運営に学生スタッフを配置したピアサポート体制により、一部の障がい学生を分け隔てなく学修支援の一環として抱え、学生同士の相互成長が促進された。
(７)大学事業としての評価：本研究の活用状況と必要性が評価され、科研費事業終了後も基礎教育センターの事業として認可され、大学の事業として継続することとなった。

［考察］
コミュニケーションおよびソーシャルスキル学習講座とホームルームクラス（居場所）の利用により、(１)不登校・不修学・不適応学生の登校契機・自己表現機会の創出、(２)修学状況の安定・継続、(３)特別支援におけるピアサポート体制創出、が成果として得られた。
大学において何らかの不適応を示す学生、精神的疾病や発達障がい、心理的問題により特別な配慮を要する学生にとって、自己肯定感や自己効力感を持つ、あるいは取り戻す過程は容易ではなく、自己像の変化の自己評価は困難であることがスケール評価から得られた。しかし、修学上の行動上の段階的変化においては殆どの学生で好転が見られたことから、行動上の変化は場所と

図１　特別支援ピアサポートの構造図



機会と条件さえ整えば、比較的容易に起こすことが可能であると言える。学生のアンケート記述からは、人前での発語や自己表現など、これまで困難であった行動上の変化の後に、自信や自己理解などの心理的変化や自己像の捉え直しが起こり、そこからまた行動が変化するといった変容の循環が生まれている様子が窺え、そこに主体的な自己感覚獲得のプロセスが生じていると言える。

以上から、大学における特別な配慮を要する学生への修学支援として、(１)居場所としての特別支援クラスの設置、および(２)スキル学習としての演習開講と単位化による一定の成果、加えて(３)学生相互支援による特別支援ピアサポート、以上３つの相補的で相乗的な構造の創出(図１参照)により、配慮を要する学生への新たな修学支援体制が本研究によって構築され、一定の成果を上げたと言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0　件）

〔学会発表〕（計　1　件）
① 鬼塚淳子　2013「自己表現場における主体的自己感覚獲得のプロセス　～大学における特別な配慮を要する学生のためのホームルームクラスづくりの試みから～」日本人間性心理学会第 32 回大会　於大正大学 2013 年 9 月 15 日

〔図書〕（計　1　件）
①村山正治監修・鬼塚淳子編・じぶん＆こころ　まなぶ BOOK ワーキンググループ著 2014「じぶん＆こころ　まな BOOK」培風館 72 ページ

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

〔その他〕（計　5　件）
［実践報告］
① 鬼塚淳子　2013「特別な配慮を要する学生の現状と九州産業大学の取組み」第３８回全国経営学部長会議　於西鉄ソラリアホテル 2013 年 9 月 13 日
② 鬼塚淳子　2013「不適応学生への包摂的アプローチ　～全学的な学生支援体制構築の試みから～」独立行政法人日本学生支援機構喫緊セミナー　於国立オリンピック記念青少年総合センター　2013 年 10 月 22 日
③ 野田涼馬・鍵中信一・鬼塚淳子　2013「九州産業大学におけるピアサポートの試み」Q-LINKS 九州地域大学教育改善 FD・SD ネットワーク Q-conferenc2013 ポスターセッション展示・発表　於九州大学　2013 年 11 月 2 日

④ 鬼塚淳子　2014「発達障がい学生・生徒への支援と高大連携　～九州産業大学における学生支援体制～」独立行政法人日本学生支援機構平成 25 年度障がい学生支援セミナー　於福岡リーセントホテル 2014 年 3 月 8 日

［教材開発］
①鬼塚淳子他　2014「教職員のための仲間づくりワークブック」九州産業大学基礎教育センター 2014 年 3 月 21 日

６．研究組織
(１)研究代表者
鬼塚淳子（ONIDUKA, Junko）
九州産業大学・基礎教育センター・特任講師
研究者番号：９０５８５６１３

(２)研究分担者
秋山　優（AKIYAMA, Masaru）
九州産業大学・経済学部・教授
研究者番号：７０２３１８４２